

自己の表出性に乏しい幼児と「解放遊び」

○土谷みち子・千葉政江

(小平記念会 家庭教育研究所)

1. 問題と目的

幼児が集団に入り、新奇な場所や人や物の状況に緊張することは多い。しかし時間が経過しその状況に慣れてきても、自己を十分に表現できないでいる子どもがいる。そのような特徴を持つ子ども達は、乳児期からの気質に拠っているだけではなく、親の子どもへの関心の低さや友だち遊びの体験の少なさ等の共通の傾向が見られた(土谷1996)。

つまり、いわゆる引っ込み思案や緊張した状態だけでなく、育つ過程での体験から自分の感情や内面を外に表出することが困難でいる場合がある。このように自己を外に表出することが難しい子ども達を、集団の中で「表情や自発的なことばや行動が表出されることが乏しい」状態ととらえ、その子ども達と集団の係わり方が、子どもの適応という観点ではなく、改善する方法を模索したい。

柏木(1988)は、3歳から7歳まで<自己抑制>は年齢に伴う上昇は著しいが<自己主張・実現>は3歳から4歳までは上昇・発達するが、その後は停滞や後退が見られ、揺れが著しいと述べ、幼児にとって自己を外に表出させ行動として実現してゆくことの困難さを指摘している。ただこの場合の<自己主張・実現>は、言語発達に依拠しており、対人経験から育つ社会的スキルが多く含まれている。

本稿では3歳児の自己の表出を、言語的な自己主張の面だけからとらえるのではなく、遊びを通して幼児が内面を外に解放し、その子らしさを集団で表現してゆく過程を一事例を元に考察したい。

2. 対象児

R児；女児、1991年7月生。

当所3歳児教室 3歳2ヶ月時入所～4歳2ヶ月まで観察。(1クラス22名の幼児を4人の保育で保育)

家族は両親、祖母、弟(1歳)、本児の5人。

就寝は祖母とだけ要求する。当所の生育面接調査では、母親の出産前の乳幼児への関心と接触体験は<少しあり>。しかし、R児を家庭犬と同じ様に可愛がれるか心配だったと話す。R児の乳児期は<おとなしい><育てやすい>子どもで、人見知り<よくした>後追いは<少し>であった。友だち経験は、1歳～3歳まで<ほとんどなし>。気質的に<おとなしい>ものが、

あったが、母親に第一子であるR児の初語の記憶がないなど、母子のインターアクションは十分であったとは思えない。また、友だち遊びの経験がほとんどない。R児の人所当初は、発声や表情がほとんどなく、自発行動は幼児や保母のかたまりからスーッと遠ざかり一人でままごとコーナーに座りに行くことが主であった。

3. 遊びの経過

一年を4期に分けて、経過を示した(下表に示す)。

我々は、幼児の自己の表出を促す遊びとして、子どもの心身をリラックスさせる遊びを「解放遊び」と称している。(表中の*印)

「解放遊び」には、以下の特徴があげられる

- 1) 子どもからの働きかけに応じて形が自在に変化する素材を選び、幼児の五感を刺激し、快感情を誘発する遊び
- 2) 単純な繰り返しの運動などで、他者(動物も含む)との相互交渉を行い、表情・発声及び歓声を誘発する遊び

「・・・遊び」は必ず「解放遊び」であるのではなく、幼児の自己が解き放たれて外に表出していく遊びがあれば「解放遊び」と称している。子どもは乳児期から(1)のべたべたや泥んこ遊びをしたり、(2)のくすぐりっこやイナイナイバーや追いかっこを保育者(親)としている。社会的存在である人間の乳児は、保育者との交渉が多いほど発声や微笑が多い

(川上、1989)といわれるが、3歳時期になっても表情や発声に自己の表出が乏しい幼児には、他者との関係で「解放遊び」を行うことが重要であると考え。また当所は、母親も幼児と一緒に集団に参加する。幼児は母親との分離が可能であれば、保育者と他児と過ごす。3歳という幼児前期に、母親との関係を確認しながら、他児や保育者との関係を形成していくことは、家庭から集団への生活の場の移行を、幼児に自信を持たせスムーズなものにしている。

4. 考察

- 1) R児は、特に小麦粉粘土が気に入って、当初は保育者の作成したものを触るだけであったが、毎回(教室は週1度開設)半年間粉から作り続けた(無言)。遊びの経過を追うと、感触を楽しむ遊びから「自己の解放」を行い、徐々に自分の限界や力を試すような熱

中した「自己の調整（表出の試行）」（表中・印）の遊び、そして保育者や他児に自発的に働きかける「自己の表現」（表中△印）に進んでいる。

* 記の解説
 ・ 記の調整・表出の試行
 △ 記の表現

幼児の集団での自己表現が、R児のような経過を必ず辿るとはいえないが、表出の乏しい幼児の遊びの観察を今後も続けたい。

2) R児の遊び場所は、集団での自己の表出が顕著になるにつれ、固定→移動に移行していった。

3) 表中に他者との関係の交渉の様子を矢印（始発行動は二重線）で示した。解放遊びには、保育者は一対一（当初はTを特定した）で付き合ったり、徐々に少人数の他児を伴って一緒に行き、常に他者の存在を感じさせながら進めている。そのことが、後半にR児の他者への自発行動を促したと思われる。

4) 当初R児は母親との関係を求めなかったが、多人数の遊びを進める行事の活動になると母親に接触を求めた。Ⅱ期以降、家庭でもドーナツ作りをしたり、自分の行動の意味付けを母親に言語化させたりして、母親との関係で自己の確認を行って、関係の改善が見られた。

時期	遊び	R児の行動	他者との関係
I期 (10月)	*小麦粉粘土 *新聞紙遊び	ずっと触る・丸める 粘土を包丁で切って渡す ボールを包んだ新聞紙を破く ちぎる・丸める・体にかける	T・接近+ことば 「たべてもいい？」 M・一緒に破く・ちぎる T・母子の横でモデル (破く・ちぎる・かける)
Ⅴ (12月)	*泥粘土 *えのぐ リズム	触る・手でこねる 色混ぜ・容器への移し変え 傍観 (多人数の他児の行動をMの膝で見る)	M・一緒に形の作成を試みるがRは感触のみ T・そばで受容・同調 (Rと同じ行動をする) M・接触
Ⅱ期 (1月)	*小麦粉粘土	粉+水+食紅+油+塩をこねる べたべたになって作る 粘土で形を作り、Tに差し出す R・「チーズケーキ」	T・一緒に作る+他児 (特定のT) (1~2人) T・「何か？」
Ⅴ (3月)	*ドーナツ作り 節分の鬼退治 ●はさみ ひなまつり *小麦粉粘土 ままごと	粉+卵+牛乳+砂糖をこねる べたべたになってずっと触る 傍観 (多人数の他児の行動をMに抱かれて見る) 集中して無言で切る いろいろな紙を切る Tを受け入れる 傍観 (多人数の他児の行動をMに抱かれて見る) 直後に、Mと分離し階段の上に一人で座る 形を作る 「作ってない、粉を買わなきゃいけないでしょ」 「(Rも) やったことある」と反応する	M・一緒に触る/形作り M・接触 M・握り方を注意しRに拒否される。 T・Rと一緒に持ち、方向性を示す。 M・接触 T・一緒に作る+他児+ことば 「家でドーナツ作った？」
Ⅲ期 (4月)	*小麦粉粘土 *どろんこ遊び *砂場遊び	粉+食紅+水+油+塩をこねる べたべたになって作る 形を作り、他児やTに配る 水遊び・砂いじり (Rの遊び場所の広がり・位置の移動)	T・時々補助+他児 (2~3人) T・距離をとり働きかを試みる (不特定のTにする) け
Ⅴ (6月)	●ままごと *えのぐ	砂・葉などで形を作り差し出す +接近+ことば「ほら、できたよ」 ぬたくり・筆で色の使い分け +ことば「せっけんも入ってるよ」 +他児の遊びの傍観・共感(笑顔) (視野の広がり・他児への共感)	T・受け取る T・一緒に遊ぶ+他児 そばを通る
Ⅳ期 (7月)	●どじょうすくい *ビニールの剣 おいかけっこ プール ●すいかわり *スプリングラー	夢中ですくう 捕れた時に笑う・発声+歓声 走る・Tをおいかける・つかまえる 歓声・他児とのみくちゅの接触 多人数の遊びの経験(T+8人) 多人数の遊びの経験(T+15人) 自発行動(たたく)をとる(20人の中で) 水をくぐる・走る・パラソルに隠れる	T・一緒に補助 共感・歓声 T・一緒に遊ぶ+他児 T・一緒に遊ぶ+他児
Ⅴ (9月)	△ジュース作り △砂場 △お家ごっこ	他児と同じ場で並行遊び 「召し上がれ」と差し出す 遊びの提案+ことば 「みんなで、これ揃ってみよう」 仲間入り+遊びの提案+ことば 「ピンポン、入っていいですか」 「これ使ってみよう」	T・そばを通る+他児 T・一緒に遊ぶ+他児 T・近くで遊びの仲介/整理役 C(他児)・「いいよ」